

『そのバックネットのバランス』

男たちは地上げ屋の仕事のために訪れた山中で、熊に襲われる。逃げ込んだのは廃棄された野球場で、男たちはバックネットによじのぼる。降りられなくなったバックネットは老朽化しており、どちらかが誤って落ちれば、もう一方に倒れそうだ。男たちはバランスを取りながら、足元の熊とにらみ合う。熊はあきらめず、男たちは次第に弱っていく。先輩格の男は、めがねをなくしており、後輩の顔も、熊も見えていない。後輩の男が「水がほしい」と訴え、水筒の水を分けてやるときに初めて、「熊に食われた」と思っていた別の後輩だと気付く。地上げ屋の仕事から逃れたくて、別人のふりをしていたのだ。先輩格の男は怒り、「そんなことをしたら、何もかも失って、人生がさすらいの旅になる」と言うが、一方で「それもいいかもしれない」と気付く。

伊地知克介

登場人物

男1 地上げ屋（先輩）
男2 地上げ屋（後輩）

バックネットにつかまっっている男たち。
ここは過疎が進み、廃棄された村営の野球場。周辺には人もすまなくなっているようだ。使われなくなっただけから相当の時間がたっているらしく、バックネットはぼろぼろである。男たちはバックネットの裏と表に1人ずつ、つかまっっている。2人の位置はやや距離がある。強い近視の男1が男2の顔が分からないほどである。

男1 どないなつとんねん。八木か。馬場か、そこにおるんは。どっちやねん。
男2 八木です。見えないんですか。
男1 めがねどつか落としてもうたんや。八木かおまえ。熊はいるんか。
男2 熊います。真下！。
男1 「います」、なんか。「いました」なんか。どっちやねん。
男2 「います」、なんか。「いました」なんか。どっちやねん。
男1 「います」なんか、「いました」なんか、現在形なんか、過去形なんか、どっちや？
男2 現在形です。「います」です。「います」。われわれの真下におるんです。こっち見えます。
男1 馬場は？どこや
男2 見なかったんですか？あれを。
男1 なんかに叫んでんのは聞こえた。馬場のやつ、熊に食われたんか。
男2 熊に追いつかれて、のしかかられてんのは見えました。うわーいうて、それ以上は見えてません。ぼく怖くて怖

男1 情けないやつや。
男2 先輩振り向きもしませんでしたやんか。
男1 想定外やな。熊どつか行く気配ないか。
男2 こっち見えます。あ、バックネット登ろうとしてる。
男1 （上に登って逃げようとする）
男2 先輩、やめてください。これ、倒れそうや。あ。
男1 なんや。
男2 バックネットは登られへんみたいですわ。熊。
男1 よかった。
男2 でもまだこっち見えますわ。
男1 しつこいやつやな。
男2 ここにいれば大丈夫でしょう。先輩落ちんといてください。
男1 落ちひんよ。
男2 このネット、ぐらぐらやから。
男1 おれが落ちると、おまえの重さでそっちに倒れるか。たぶん。
男2 おまえも絶対落ちんなよ。
男1 落ちませんよ。
男2 熊があきらめるまで、ここにおるしかないんやな。
男1 しゃあないですね。
男2 ああ、腹立つな。八木。
男1 はい。
男2 携帯はどうや？
男1 はい？
男2 やっぱり圏外か？
男1 圏外です。
男2 仕事早よ終わらせて夜は女に会う予定やったんや。全然あかんやないか。連絡もできんやないか。
男1 先輩の彼女いうてましたよ。いつも仕事ばかりでなかなかおうてくれへんて。

男1 彼女ってどの？
 男2 え？
 男1 ターニア？
 男2 いえ。
 男1 アンジー？
 男2 いえ。
 男1 マリー・フェルメール？
 男2 なにじんですか？つーか、先輩なんにとつきあってい
 るんですか。何カ国に彼女おるんですか？
 男1 全大陸目指してんねん。
 男2 南極が無理っしょ。
 男1 おまえが言うてんのは、あれやろ。オゴンボやな。
 男2 あの人、粗末にするとやばいっすよ。なんか、アフリ
 カ仕込みの変な術を使うって聞きました。人を呪い殺
 すとか。
 男1 ただの占い師やで。そんな術使えるんやったら、連れ
 てくるんやっつたな。熊公呪い殺してもらえたな。
 男2 熊は無理っしょ。
 セミの声が大きくなる。暗転
 照明が入ると二人やや弱った感じ。
 男1 なんの罰ゲームやねん。こんなとこで、熊とにらめっ
 こって。どうやねん。
 先輩。
 なんや？
 男2 なんてわざわざこんなとこまで出張ってこなあかんか
 ったんですか。地上げって、都会でやる仕事やと思っ
 てました。
 男1 20世紀はそうやったんやろな。おれらの先輩が食い
 荒らして、都会にはもう地上げする場所がな

男1 ないんすか。
 男2 あるけどな。少ないんや。それをいろんなやくざとか、
 外国人が奪い合ってるんや。これからは、田舎にこな
 あかんのや。
 男1 こんな山に何があるんすか。
 男2 特別に教えたる。人に言うなよ。
 男1 誰に言うんですか。
 男2 水源や。
 男1 水源？
 男2 日本の水は海外で評判がええねん。これからは、水源
 地の土地が、シノギになる時代やで。
 男1 すげえ、最先端っすね。
 男2 そやから！こんなとこにいるわけにはいかんのや。
 男1 熊さえいなければね。
 男2 こんなんしてたら、あいつらが先に着いてしまうやな
 いか。
 男1 あいつら。
 男2 チャイニーズのやつらやがな。
 男1 あいつらですか。中国人がこんなところにも手を伸ば
 しとんのですか。
 男1 そや。あいつらに負けるわけにはいかんのや。くそ。
 男2 熊はよどつかいかんかな。
 セミの声が大きくなる。暗転
 照明が入ると、2人相当弱ってきた感じ。
 男1 何の罰ゲームやねん。何の罰ゲームやねん。
 男2 先輩。おれ、もう無理かもしれないます。
 男1 落ちんなよ。
 男2 手に力が入りません。
 男1 落ちたらおまえ

男2 え？

男1 熊は、ほんまにおるんやな。

男2 試してみたらええやないですか。

男1 なんやと。

男2 突き落としてみるや。

男1 (間) わけを言えや。面倒みたったやないか。おれをだましてまで、なんで八木のふりをするんや。

男2 会社やめたかったんです。

男1 あ？

男2 少しもいい思いはできないし。おれ、向いてないんすよ。でもうちの会社、あれでしょ。あつちの世界とつながってて、やめるいうたら、えらいことになるいうて、みんな言うてるでしよ。

男1 そういう面もあるな。

男2 八木が熊にやられて、先輩がめがねなくした時、今やと思っただです。おれという人間は熊にやられていなくなったことになれば、おれは、おれは、自由になれるって。

男1 おまえな。何考えてるんや。自由になれる代わりに、おまえ、もう馬場やなくなるんやで。自分やなくなるんや。なにもかもなくしてしまおうんやで。仕事も、仲間も、家も、行きつけの店も、なじみの女も、先輩も、後輩も、なんも、かんも、なにもかもなくして、ただの、1人の人間やで。なんも持ってない1人の、人間で、人間であることしか、それしかなくて、一生続く、どうしようもないさすらいの旅やで。(ふと気付く) それもええかもな。

男2 先輩。

男1 それもええかもしれんな。

セミの声が大きくなる。暗転

照明が入ると、2人、息も絶え絶え。

先輩。

あ？

男1 おれら死ぬんですかね。

男2 どうせ死ぬんなら、熊と勝負するか。

男1 武器があればな。

男2 武器な。オゴンボが言うもったな。人間が使える一番重い武器はなんやと思う。

男1 核兵器っすか？

男2 言葉や。

男1 言葉？

男2 心をちぎったもんやから、言葉が一番、強いんやて。そうなんすか。なんか、オゴンボさんの言うことって信じられる気がしますね。

男1 そうか、やってみるか。熊に言葉、ぶつけてみるか。

男2 熊、死ね。

男1 そんな、あかん。

男2 あかんですか。

男1 そんなんでよければ、やくざはチャカ使わんと死ね死ねって言い合えばええんやろ。

男2 どんな言葉がええんですか。

男1 感謝の言葉や。ありがとが一番重いんや。

男2 は？

男1 おまえ言うてたやろ。ナイル川委員会。人類はここまでできたんやって。

男2 言いました。

男1 それや！人類がここまで来たことへの感謝を、なんか、人類よりすごいものに、言うってのはどうや。重い言葉にならへんか。

男2 いいっすね。重いっすね。

男1 よしそれでいこう。ええか。人類として言うんや。

男2 人類として？

男1 そうや。ええか、始めるで。ありがとをいうんや。お

